文学全集

41

幸田文
円地文子

新潮社版

日本文学全集　41

幸田　文
円地文子

発行／1967年9月15日　十一刷／1969年9月25日
発行者／佐藤亮一　東京都新宿区矢来町71
発行所／株式会社・新潮社　東京都新宿区矢来町71
電話東京(260)1111(大代)　振替東京808　郵便番号162
印刷所／株式会社三秀舎　製本所／大口製本所
本文用紙／本州製紙株式会社
函貼／三菱製紙株式会社　製函／文京紙器株式会社
カバー・扉・見返／特種製紙株式会社
表紙クロス・日本クロス工業株式会社

乱丁・落丁本はお取替えいたします　Printed in Japan 1967

目次

幸田文

終焉　五
勲章　一五
髪　二五
黒い裾　三一
雛　五一
流れる　六三

円地文子
朱を奪うもの　二四一
女坂　三五九
注解　五〇三
年譜　五二一
解説　奥野健男　五二七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

幸

田

文

終焉

七月十一日朝、祖父*の部屋へ掃除に行った玉子が、「おじいちゃん血だらけ」と云って来た。なるほど父は、頬・鬚・枕・シーツと点々と綴る赤の中に、しかし平常な顔色でいた。

慌しい私をいぶかしげに見迎えて、「どうかしたのかい」と、まったく平静な声で訊いた。まず安心して、「血が出ましたね」と云ってのけた。「ははあ、ゆうべ痰がつまって苦しいと思ったのは、あれは血なのかい。ハテネ」と考えている。脈に触れて見る。正しい。熱は無い。血はまったく乾いていい、痰吐きの中は相当量の赤いもやもやが拡がっている。父にうそをつくと、観破されて恥しい目にあうから、大概のことは卒直に云ってしまう。いつもの血痰と質が違うらしいこと、量も格段に多いことを知らせる。時刻は一時前後のことと思われる。近年蚊帳を吊るのが嫌いになって、蚊遣り香ばかりを用いる。夜前は毎日通り、二回目の渦巻に火をともして足もとに置きに来たのが十二時半、眠い目に見た時計はたしかに、短針が十二時をちょっとずれて長針と一直線であった。わりに耳ざとい私が何も知らないで寝ていたことからすれば、恐らく二度目の寝入りばなの一時前後と考えられた。二燭の電燈がいかに暗いにもせよ、目もうといにせよ、これだけ量の出血をよく意識していないらしいのは、どういうことなのだろう。吐くことに苦痛を伴わなかったのでもあろうか。早く起きて手水がつかいたいと、助け起されるために差し出した左手の袖に、べとりとついた血に気づいて、「エエきたならしい、意気地の無いざまだ」とじれだした。こんなに方々汚すほどなことを、よくも覚えないでいるもうろくに、腹を立てていることは明らかである。半醒半睡の間の出来事だったと見られる。

こういうことは如何とも慰めがたいことだった。寝たきりになってからは、とかく身の不自由、ぶざまが疳の種になることが多く、自分を嘲罵するさまは気の

毒であった。今聞くこれも、いつもと変りは無いけれど、目に見る姿を伴っては痛々しかった。血は頬髯・顎髯を捩じてむざんにも幾筋かの糸とし、余は伝って喉にまで尾を引いている。前後をはかるよりさきに、ことばは口を離れてしまった。「こんなに血が出ているのに、胃からにしろ肺からにしろ、お起きになるのはよした方がよくはないかしら」と。云わせも果てず、「又はじまった、おまえの素人医者は、置いてくれ置いてくれ。つべこべ云う間に素直にやれ。猿は血を見ると騒ぐと云うが人間のサルも始末が悪い」いたしかたも無くて静かに脊中を支えて起したが、機嫌の悪さは動作の重みにあらわれた。つかが倒れてぶよりと凹む畳を、私は踏みしめねばならなかった。いつの間にか玉子は心得て、清水のコップに手拭を添えて待っていた。目顔でわかりあって、日課の牛乳買いに行くと繕って、近くの中山に住む土橋さんへ応援を頼みに走った。

午後二時、ふと予感があって立って見たが、いつも寝勝手の右を下にして、なんでもなく寝ている。引き返して三四分、不安で又立って窺った時は、左手をのばして痰吐きを取ろうとしていた。吐かれた物は小さい血の塊であった。続いて間切り間切り、泡立った鮮かな色は押し出された。痰吐きを支えて、手の施しようも無くいた。と、顔全体に見る見る充血して来、瞼は怒張し、苦しみの筋は走り、咳のような嘆のような声と一緒に、ぬらぬらとちぎれない物が出た。父は左手を染めて、口中を盛んに掻きさぐった。漸う私は点火されたようになり、父の手を払いのけるや我が手にそのいやな物を取りのけようとし、それはべたべたと方々へへばりついた。口の中には血のりの紐が垂れ下っていい、はじめて出血は右上奥歯からであると知った。強い食塩水の含漱がきいたか、脱脂綿でした圧迫が効を奏したか、冷い井戸水が役立ったか、或は出ずべきものが出てやんだのか、知らない。気がつくと私と押並んですわった土橋さんの、浴衣の脊中は汗で水を浴びたようになっていい、玉子の白麻のスカートにも花模様が散っていた。「血去り惕れ出ず、歯からでなけりゃこっちが」と頭を指して、「やられたかも知れない。このくらいの血は案じるにはあたらない」と云っていた。シーツの斑点には新しい手拭を覆って、三

人は無言で隣室へ退った。

玉子は氷屋・薬屋へ、土橋さんは東京の歯科先生へ、お茶一杯煙草一本の間も惜しんで出てしまった。約十分。第三回の出血がはじまった。相つぐことに一人は心細かった。助けを求めたさに浮く足を無理にすわっていたが、痛みも無くがぶっがぶっと出る血は恐ろしいものであった。室はなまぐさく、私にもからえずきが上って来、せつなかった。大ぶ疲れたらしく、こめかみに汗が浮き、肋は上下している。ふと親一人子一人という感情が走って、突然、「おとうさん死にますか」と訊いた。「そりゃ死ぬさ」と変に自信のあるような云いかたをし、「心配か」と笑った。柔いまなざしはひたと向けられ、あわれみの表情が漲った。私もまじろぎをせず、見つめた。遂に何だか圧倒されて、ひょこりとおじぎをしてしまい、そしてそのおじぎにてれ、涙が溢れはじめ、いたたまれず立った。廊下へ出しなに振返って見た時に、父は立て続けに緩いあくびをしていた。けさ父が何も気づかず、どうかしたかいと云ったそのことば通り、どうかしたことがはじまっていたのであった。

*

空襲の噂に東京がざわつき出した頃、春はまだ深く、父はひとりで伊東の風光を楽しんでいた。或日、私は糀町の叔母に呼ばれ、「親子離れ離れにいてもし不慮のことがあった時には、おまえは申しわけもあるまいし、かつは私達にしても疎開如何についての兄さんの御意見も伺いたいから、一トまず帰京を促しては」と云われ、尤もなことに思い、早速迎えに行った。

来意を聴いて機嫌は曇ってしまった。「*お延はとにもかくにも一生を芸で押し通して来ている、しかももう七十を過ぎてる身で、死について考えた機会は幾度かあった筈だ。空襲はそりゃ恐ろしいものかも知れないが、だからと云ってわざわざそれでおまえを迎えによこす程うろたえている筈は無い」ときめつけ、「又おまえにしてもおかしな使に来たものだ。小さい時から母親に死なれ、弟を送り、先頃は縁にも離れている。多少とも人生の磨礫にあっているじゃないか。も少しはわかっていると思っていた」といやな顔を見せて煙管を取った。同行の親類の女人はしらけきって迎

合追従的な無意味なことばと笑顔を向けたが、これは案の定父の癇を爆る結果となった。「生死を云うのならばおまえ達の分際でにたにた面は不謹慎だろう」と開直られ、これは大変なことになって来たと、尻込みすることもできずかしこまった。「一体、爆弾で砕け死ぬということが何なのだい、イヤサ死ぬということをどう思っているのだ」と一語は一語にましてきびしくなって来、しどろにする返事は更にことごとく気に入らるべくもなかった。問題が生死のことであったから、はからずも知った子の不覚さは、それが子ゆえにこそなお許すまじき気勢で、東西古今をたてよこに織りなし、畳みかけ畳みかけ、長い時間をしゃべった。はじめ私は恐れて堅くなり、やがてただその大河の勢をもって語られるところに全く呑まれ尽して、いたしようも無かった。いつか話は又もとに戻され、電撃的なことばは私を刺した。「もしこのわたしの身体が道端で膨らみあがって爛れ死んでいたら、どうだと云うのか。おまえは発狂でもする気か」と。反射的に胸に描いた猛火の図にぞっとし、「そんなのいや、もうやめて」と歎願し、「いやでは済むまい、そんななまぬるっこいことでいいと思ってるか。死の惨さ厳しさにも徹し得ないおまえらが、安全のどうのと憚りも無くしゃべり散らすとは慢心の至りだ」と浴びせられ、私はへこたれきった。

「もういいから湯にでもはいっておいで」と、自分から石鹸を取って渡してくれたりした。湯舟に寄ってゆったりとし、思いかえし、そしてはっと狼狽した。これは一体どうしたことだ、あんなに話してくれたあれは何だったのか、何一ツ覚えていない。あれほどの熱をもって説いてくれた数百語は、どこへ行ったのか、まるで手がかりも無いまでに忘れてしまっている。皆無であった。当惑の底に浮いて来たものはただひたすらに、おとうさんと呼ぶ子の情であった。死なれたくない、怪我もさせたくない、生きていてもらいたい、そのおとうさんである。生き身の恩愛、親子の絆、何を聞き何を忘れて、ここにこの心があるのか。知らぬ。不敵というにはか細く、慢心というには悲しい。業とならば、よし苦にも裂けよ、執念ならば地獄にも堕ちよ、あわれこの心をつきとめて、も一度生死の話を聞く折をもとうと念じて、翌日は一人帰京した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

秋、父はめっきり弱り衰え、足腰の不自由に黙々と耐えていた。私はしばしば静かさに不安を感じて、父の部屋を覗込みする癖がついた。十一月、東京は空襲された。親子は再び生死を、それも数分後には或は実際になるかも知れぬ生死を話すことになった。しかし伊東の時のように多くをしゃべる時間は無かった。塀一ト重向うは防護団の溜りで、ラジオやら絶叫やらはとちらの話をさまたげた。

こんな場合には死にざまは幾通りあるか知れないし、なおさら死に時のいつは計り得べきでない、そんなことはみんな思考のほかにあるのだから、あらかじめ決めて考えようとするのは自由を失うの愚であると云い、小机を前にして動きたがらず、庭さきの薔薇を眺めている顔には久しぶりの表情があった。将棋を差す時の、あの鼻の厚みの増して来る顔であった。来ることはそのままに、すかっと受取って滞らないのだとは、よくわかっている。が、その膝は薄く、その手の白くて骨立ち皺んでいるのを見ては辛かった。遠い爆風でも皮膚は木目のように壊れたとか、ガラスの破片は忍返しのようにささってとかいう話は、戦慄をもって父の身に考えられ、またしても生き身の父を安泰に保ちたい思いで、胸は一杯になった。

誰にしても素掘りの壕や押入を鉄壁と頼むわけのものでもないが、八十に近い人といえば常不断でも何か覆う物が欲しい気がするではないか。常識といわれる程度のあれこれの支度が、次々とせわしく思いめぐらされた。それに人手はまったく無かった。声をかければ或は得られる人手かも知れないが、非常時ゆえなお他人をわずらわせることをしまいと、ほんとに親一人子一人でいる。頼る者の無いことは勇気を生じさせるが、又一方些末なことにまで分担を許されなかった。私は防護団に叱り飛ばされながら、筵に水を打ったりせねばならなかった。*マリヤとマルタの話が心に痛く思い出された。それもこれも僅かの間のこと、B29の爆音と続いて起った破壊の轟音は、容赦無く処置の決定を迫った。未知の予期された危険に対する興奮が、私を駆り立てた。すでに書物を疎開して荒涼たる部屋に、むきだしに一人すわった父は傷ましく、せめて押入にでも庇いたくて、ろ骨にいやな顔するのを頼んだ。

「これがおまえ流の安全か」と皮肉り、「私は年寄だ、おまえの指図に従うが至当だろう。一ト言云っておく、私に強いたようにおまえ自身にも強いるだろうね」ことばは穏かだったが、面をあげていられぬような怒りを受取った。入口を布団で塞ぎ、その前にすわって、さて寂しかった。何がいけなかったのだろう。押入がいやならいやと云えば済むこと、指図も何も無い。強いるといったとて手を取ってするわけじゃなし、今までだって常に絶対であった父だ。要するに空襲下に端座する父を平然と見ていられないところがポイントであるとも思えた。いつも愛情というものをあんなに悦びとうとぶ人が、今この際に古筵一枚でも庇いにしたい子の情を、なんでかほどにまで拒絶するのか。ではこれは嬶妾の愛というものなのか、或は不謙遜にも当るものだったろうか。猛火の図が思い出され、発狂ということばがよみがえった。ど、どっというような音響が起り、あたりは揺れた。防護団が出動出動と叫んでいる。不安と恐怖でこらえられず、「おとうさん」と呼んだ。

咎めが槍のように飛んで、「馬鹿め、そんな処にいて。云っておいたじゃないか、どこへでも行ってろ」張りつめた神経は自ら支えることを失って、「このさなかにおとうさんのそばは離れられない、どこへ行くのもいやです、行きたかありません」一ト たびことばを返しては、われからずんと据わるものがあった。「行きたいんじゃない、行けと云うのだ」「いやです」「強情っ張りな、貴様がそこにいて何の足しになる」「どうでもいいんです、おとうさんが殺されるなら文子も一緒の方がいいんです。どこの子だって親と一緒にいたいんです」「いかん、許さん。一と二は違う、粗末は許さん」「いいえ大事だからです」「それが違う。おれが死んだら死んだとだけ思え、念仏一遍それで終る」「いやです、そんなの文子できません」「できなくてもそうしかならない」「では、おとうさんは文子の死ぬのを見ていられますか」片明りに見る父の顔は、ちょっと崩れて云った、——「かまわん、それだけのことさ」

ちいさい時から人も云う、愛されざるの子、不肖の子の長い思いは湧き立った。「それでは文子は何ですか」「子さ」「子とは何ですか」「エエけちなこと云う

な、情とは別のものだわ」と怒声であった。「それじゃ文子のこのおとうさんを思う心はどうしますか」「それでいいのだ」「あんまり悲しい」「悲しいにはじめからきまってる」——鼻の芯が痛く話は終った。云いたくて云えないものが、いしかっていたが、涙が塞いでいる。水道は出なかった。勝手の柱によりかかって、云われたことを反芻した。

爆音がしずまるとすぐにのべた床に横になって、腰が痛いとこぼす父は、まだ不機嫌が続いて些細な事毎にひっかかって来た。こうなって来ると或一定の処までは許さずに押すのがきまりになっていたが、この日は私の嫌うところへ触れて来た。以前の婚嫁先の悪風、それに染って改めることをしない私の態度が挙げられ難詰され、畢竟きょうのああいう態度もああいう愚問もそこから生じる、娘時代から思えば恐るべき退歩、驚くべき堕落だと、不断は思いやりが深くて婚嫁先のことを云う時など代名詞でそっと云うような優しい人が、今はびしりびしりとものを云った。そこまでは耐えていた。その愚問を父は一々覚えていて抉った。下性・下根・不勉強は取り出され、意地悪く切刻まれた。耐えられなくなった私が、むしろ一度ことばをかえした経験が二度目を慣れさせたというかたちになったのがいけなかった。父は利かない身体を起した。あっと云う間に後れ毛と一緒に襟髪を押えられた。痛さと、かつて無いことの驚きとで逆上した私は顫え出し、振上げられた手を見て、「おとうさん打つんですか」と訊いた。手はおろされず、二三度こづいて放された。父は夜著を摑んで睨みつけていい、「わたしはな、おまえが帰って来た時にどんなに、アアお幾美が生きていたらばと思ったか知れない。今又しみじみお幾美のいないのが悲しい」と。余りのことに声も出ず唇を噛みしめ、介添して横にし、下がけをかけた。「我不敢軽於汝等、汝等皆当作仏故」と洩れたのを聞いた。

*

二十五日夜、この晩も私と土橋さんが起きていた。もう三日ほども父は眠らない、睡眠剤はきかない。今思えばあの目つきはそれそのものと明瞭であるけれど、その時は皆疲れて神経も平衡でなし、底に快癒をねがう切な気持を含んでは、ものの見かたもかたより

がちで、「いつもとは違う目ですね」と口に出して云いあっていながらも、それを近いと思えないのが所謂死魔にくらまされるとでもいうのか。父は眠らない目を見張っていた。その身体をかりて行われた戦は、すでに峠を越したと思われる。はた目にはさほど苦しがりもせず、ただ物を欲しがらず口を利くのが大儀だと云うくらいでいたけれど、そばにすわって見つめると、地水火風の*咥みあうのがわかるような気がして惨かった。

身体の向きをかえてくれと云っているので、左下に向け、土橋さんは父と対いあい私は脊を見る位置になり、別に痛いとは云われなかったが期せずして二人とも摩擦をはじめた。肩と脊は日々骨立って来ていた。「痩せましたね」「むむ、――」と受けて、「こうしてあっちへ向けてもらったりこっちへ向けてもらったりしているうちに、自然の時が来る」とさりげない調子で云った。私は父の肱を摑んでのしかかった。「おとうさん、そうなりますか」「なる」くるりと眼球が動いて、血の日と同じ優しいあわれみのまなざしが向けられ、深い微笑が湛えられた。

かちどきのようなものにつき抜けられて、「おとうさん、えらいなア」と絶叫した。土橋さんも同時に何か云ったようだった。聞えにくかったらしく、「なんだ」と云う。何を云ったのだというのである。私はくりかえした。「なぜさ」「だってみんなまだそう思わない」噴き出すように笑って、「そのくらいのことアおまえ」と云った。見つめたなりで私は声を放って泣いた。「おとうさん」と呼ぶと、薄い瞼のうちで再びくるりと目が動いて、きつい瞳が見かえした。空襲の日の、文子が死んでもかまわん、それだけのことさと云った時と同じであった。そそけ立って、声をのんだ。目は閉じられ、微笑はひろがり、いつまでも消えなかった。かちどきというものを私は知らない。けれどもそれより外に云いあらわせないものが、そくそくとして溢れた。幸福であった。

二十七日。宵のうちは無性に眠くて居眠りばかりしていた。気がつくと、土橋さんも長々と伸びて、苦しそうな*鼾をかいている。父ばかりがぽかりと目を明けていた。*ゲッセマネの園。はっきり覚めて、氷をかえたり果汁をあげたりして雑談をした。そのうち、「小*

石川のうちはどうした」と云う。「さあ八月一杯と云いますが」「そううまくは行くまいが、今年中にはかたがつくな」土橋さんを突いたりゆすったりしたが、石の如く感じなかった。時に遇わずだと思い、やめた。評釈*のこと、出版のことは度々話していたが、今もまた承知していることを確めるように話した。「七部はあれはもうできちまっているんだよ、おまえは心配はいらないよ」仕事には一切関係しなかった私だから、説明しておくつもりらしかった。「本の方も次々に出るね、うまく行ってるね」と念を押して、「何もみんないいね」と実に楽な話しぶりをした。明瞭な返事をし、うなずいて受けた。

仰臥し、左の掌を上にして額に当て、右手は私の裸の右腕にかけ、「いいかい」と云った。つめたい手であった。よく理解できなくて黙っていると、重ねて、「おまえはいいかい」と訊かれた。「はい、よろしゅうございます」と答えた。あの時から私に父の一部分は移され、整えられてあったように思う。うそでなく、よしという心はすでにもっていた。手の平と一緒にうなずいて、「じゃあおれはもう死んじゃうよ」と何の表情もない、穏かな目であった。私にも特別な感動も涙も無かった。別れだと知った。「はい」と一ト言。別れすらが終ったのであった。

（昭和二十二年）

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton